

No.17

2004.3.1

# いしかわの遺跡

## 塀囲いの建物群発見



さかえまち  
七尾市栄町遺跡で発見された、奈良時代から平安時代にかけて存続した掘立柱建物群です。2列の板塀が建物の周囲を取り囲んでおり、当時の一般的な村の姿とは大きく異なるようです。どのような性格をもった遺跡だったのでしょうか。

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp

ホームページ <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

## 平成15年度発掘調査から

# 栄町遺跡

さかえまち  
栄町遺跡は、一般国道249号線道路改良工事に伴う発掘調査によって新たに発見された遺跡です。

遺跡の所在する七尾市栄町は、能登国分寺の北約1km、地形的には、石動・宝達山地を水源とする河川によって供給された土砂により形成された複合扇状地の先端部に位置し、更に北側約2kmには七尾湾が広がります。

今回の調査では古墳時代から室町時代までの遺構を確認しましたが、その中で最も大きな成果として、奈良時代から平安時代にかけて存続した掘立柱建物群があり、板塀によって取り囲むといった特徴があります。

板塀は、西側と南側を検出しました。内側と外側との2列の塀によって取り囲み、その間を通路として利用したのでしょうか。あるいは、外側の板塀にのみ柱材が残っていたことから、内側から外側へと作り変えられたことを示しているのかもしれませんが。また、板塀の構造にも特徴がありました。それは柱と柱の間の溝の深さが一定ではなく、凹凸が認められたことから、横向きの板を順に積み上げたのではなく、縦向きに板を並べたようです。

建物は、すべて掘立柱建物で、合計22棟の建物を復元しました。このうち、最も規模の大きな建物は東西4間、南北7間の規模をもち、各柱穴の間に溝でつなぐといった特徴があります。同様な建物は3棟確認しており、いずれも板塀の内側で見つかっています。

最後に、この建物群の性格についてですが、在地の有力者の邸宅、あるいは、何らかの公的な施設の可能性が考えられます。後者については、これまでに研究者によって調査地周辺が国府の縁辺部に相当することが推定されており、その可能性を裏付けるように国分や古府などの地名が残っています。今回の調査では遺物の出土も少なく、その性格を特定するまでには至りませんでした。今後の調査の進展によって七尾の古代史解明につながることを期待されます。



能登国分寺と栄町遺跡（北より）



板塀（西より）



大型掘立柱建物（北より）

## 末松遺跡



県道北側の調査区（北より）、東側（写真左）に遺構が集中している。



県道南側の調査区（写真上が北）

すえまつ

末松遺跡は金沢市の中心部から南西に約8km、野々市町末松地内に所在し、手取川扇状地の扇中部に立地します。石川県立大学（仮称）整備工事に伴い、昨年度から発掘調査を行っています。昨年度は古墳の周溝の可能性が指摘されている方形の溝や掘立柱建物跡などが発見されました。近くには、国指定史跡の末松廃寺跡があり、国道157号線建設などの調査で確認された7～9世紀頃の竪穴住居跡や掘立柱建物跡は同寺と関わりのある集落跡と考えられています。

調査区域は県道をはさんで南北に分かれており、西側を国道157号線（鶴来バイパス）が通っています。

今年の調査では、奈良・平安時代の集落跡の状況を確認しました。県道北側の調査区では、8～9世紀頃の畠跡、道跡（昭和62年調査で確認された道跡の北側側溝部分）、10世紀頃の掘立柱建物跡などを確認しました。遺構は調査区東側の微高地に集中しています。畠跡は南北に長い溝として確認され、溝と溝の間にある畝の高まりは残っていませんでした。6～8条の溝（畝にすると3～4条）を一つのまとまりとして、2～3回の作り替えを想定することができます。調査区の南側は昭和62年に調査されており、その成果と総合すると、道跡の南北に畠跡が存在することが明らかになりました。畠跡は集落の生産域として計画的に造成されたと考えられます。

県道南側の調査区では、国道に最も近い調査区で、竪穴住居跡を確認しました。土師器の甕や杯が出土し、その年代から8世紀頃の竪穴住居跡であることがわかりました。年代や位置などから、国道の発掘調査時に確認された集落跡の一部と考えられます。また奈良・平安時代の溝・小穴などを多数確認しました。

溝・小穴などは調査区の北側に集中し、南に行くに従って希薄になるので、調査区の南側は末松遺跡の縁辺に位置していると考えられます。このほか近世の川跡がみつかっています。



畠跡の調査風景（手前から奥に伸びる溝が畠跡）



道跡の側溝部分、幅約1.5mで人が入れる程度の大きさ



県道南側の調査区、幅約2mの溝を両側から掘っているところ

## 金沢城跡

金沢市広坂地内の県庁跡地における埋蔵文化財確認調査が同敷地内の 教育庁舎跡地、金沢中警察署跡地、東庁舎駐車場跡地で行なわれました（各調査区の位置関係は写真参照）。その結果、江戸時代をはじめ、戦国～江戸時代初期、奈良・平安時代の埋蔵文化財が確認されました。

県庁跡地周辺には、江戸初期に京都の三十三間堂を模した的場（弓の稽古場）が存在し、「堂形<sup>どうがた</sup>的場」と言われ、そのことから付近にあった米蔵や馬場も「堂形米蔵」「堂形馬場」と呼ばれるようになりました。17世紀後半以降、米蔵が中心の蔵屋敷地となっても、「堂形」の名前は残り、堂形＝米蔵を意味する名称として定着しました。そして、教育庁舎跡地ではその堂形蔵屋敷時期の新旧2条の辰巳用水が検出され、木製の樋（木樋）から、石製の管（石管）への改修が確認できました。その改修時期は、絵図や文献との照合から天保14（1843）年頃から嘉永3（1850）年頃の間と考えられます。辰巳用水に平行して、土塀の基礎と考えられる石列も見ついています。他には、焼土を含む江戸時代前期の整地層から炭化米が発見されました。この炭化米の発見から、既に江戸時代前期には堂形米蔵が設置され、火災にあったことを確認し、これは寛永大火の米蔵焼失を伝える江戸中期の編纂書（『三壺閣書』）の記述を裏付けることになりました。

金沢中警察署跡地からは、堂形蔵屋敷の南縁の外周水路が発見されました。この水路は東庁舎駐車場跡地でも確認されており、その規模は、幅約2mで、深さは現地表面から約1.3mです。当初築かれていた護岸石垣は、明治の初期の埋め戻しで大半が取り除かれていましたが、その下から石垣基礎の沈下防止用の胴木（枕木）が確認されています。

その他に東庁舎駐車場跡地では、厚く堆積した堂形造成土と、その下から堂形蔵屋敷以前の土塁と堀の一部が確認されました。土塁の規模は幅4.5～3.2m、高さは堀底から1.6mであり、当時の地表面から約60cmの盛土がされていました。地区内で、ほぼ直角に曲がるように構築されており、建物域等の区画施設であると考えています。構築時期や内部の施設については判明していませんが、土塁や堀を伴うことから館や寺院等が存在していた可能性もあります。さらに現地表下約1.6mで確認された奈良～平安時代の包含層や土坑からは、布目瓦や土器（須恵器）が出土しました。県庁跡地での古代遺跡の確認は今回が初めてとなります。広坂通りに南接する広坂遺跡（金沢21世紀美術館建設地）の発掘調査（平成8～12年度、市埋蔵文化財センター調査）では、古代寺院（奈良・平安時代）の一部が確認されており、その続きが県庁跡地に展開すると想定されます。



調査区全景



辰巳用水（石管・木樋）と石列



堂形南側水路



土塁

## 第5回 いしかわの発掘展 「この世とあの世をつなぐもの - 中世墓の世界 - 」

いしかわの発掘展は、石川県内で発掘された考古資料や考古学研究の最新成果に焦点をあてて、いしかわの歴史や文化をみつめる企画展です。

第5回いしかわの発掘展は、平成15年8月1日(金)~8月31日(日)にかけて「この世とあの世をつなぐもの 中世墓の世界」を開催しました。

今回は、最近県内でも調査事例が増えている中世の墓をテーマにしました。

中世の墓には、墳丘墓、周溝墓、配石墓などいろいろな形があり、埋葬方法も土葬や火葬など様々です。中世前半は、特定の階層による木棺墓や土坑墓が見られ土葬が主体です。中世後半になると一般の人にも



復元された石塔みやたけはかたに (辰口町宮竹墓谷中世墓群)



広がり、火葬による配石墓などが目立ってきます。

また、中世後半から埋葬地の上に立てられる墓塔が出現します。墓塔には、木製の塔婆や五輪塔・宝塔といった石塔があります。石塔には、地域によって特徴的なものが見られ、加賀地域では、福井県北部の影響をうけたとされる五輪塔に似た宝塔があります。

珠洲焼の蔵骨器  
(志賀町坪野遺跡群、辰口町宮竹墓谷中世墓群)

展示は、「墓塔」「埋納物」「墓の変遷」などのコーナーに分け、中世墓遺跡から出土した卒塔婆や五輪塔、土師器皿や銅銭、珠洲焼、加賀焼の蔵骨器などを紹介しました。また、辰口町宮竹墓谷中世墓群から出土した石塔を組み直し、当時の墓地の景観を復元しました。

今回の発掘展を通して、人はいつの世も亡くなった人の生前を偲びながら手厚く葬り、故人に対して思いをはせていることがわかりました。



職員による解説も行いました。

## 第5回古代体験まつり

今年度は、10月4日(土)・5日(日)の2日間行いました。初日は一時にわか雨が降りましたが、2日間で1,250人もの方に来ていただき、まが玉づくりをはじめ約20種類のメニューを体験してもらいました。また、YOSAKOIソーラン日本海「あさがおつるべ隊」の方々に参加していただき、『スーパージョウモンおどり』を披露してもらいました。ここで、それらの様子を紹介します。



古代の衣装をつけての「あさがおつるべ隊」による『スーパージョウモンおどり』です。



「火おこしレース」入賞者には、ハニワなどの豪華品をプレゼント。



縄文土版はうまく焼けているかな。(粘土でつくり、センター職員がその場で焼いてできあがり。)



木製の土掘り具を使っての、さといも収穫体験です。



弥生の機織り体験。最初はむずかしくても、コツさえつかめば簡単です。



縄文時代は、弓矢を使いシカやイノシシを捕まえていました。



縄文時代もクルミなどの食材を使い、クッキーのようなものを食べていました。



まが玉づくりは、盛況で常に満員でした。

# 環日本海交流史研究集会をおえて

平成15年度の環日本海交流史研究集会を10月24日に開催しました。昨年度までは、2月という雪深い時期に行っていました。しかし、冬場は私たちにとって報告書を作るのに忙しく、発掘調査を行っているときにできない仕事をこの時期に集中して行うので、実はたいへん慌ただしい季節なのです。そこで、今年度から9月という気候のよい時期に行うことにしました。今年度のテーマは「縄文後晩期の低湿地集落 - 生業の視点で考える - 」です。このテーマを選んだのは、2回連続して弥生時代のテーマとなったので、この時代を避



いよいよはじまるぞ。緊張する司会の  
大西さん。開会の挨拶は谷内尾所長。



スライドで熱弁の金沢市の谷口さんと画面に熱い視線が...

きたいという思いと、「石川  
とえば“縄文”だろう」という私たちの自負から、この時代を選びました。そして、縄文後晩期の低湿地の集落の発掘例が多くなってきたので、「かつて縄文農耕が言われた金沢の低地にある近岡遺跡は、現代ではどのように評価できるのだろう」という、私たちの素朴な問題意識からこのテーマを選びました。

今回も北は北海道から南は九州まで10人のパネラーで発表を行いました。前回

までと違う点は、丹後・丹波地方にこのような遺跡が少ないので今回の発表は見送ったことと、石川の代表的な低湿地遺跡の事例報告に能都町の真脇遺跡と金沢市の中屋サワ遺跡をお願いしたことです。



会場は熱気でムンムン。暖かく  
暗いからといって寝ないでね。



いつもするどい質問の藤先生、  
お手柔らかにお願いします。

私たちは、低湿地といってもその生活環境が違うのできっと低湿地を基盤にする生活に何か共通するものが見えてくるような気がしていました。しかし、現実にはそんなに甘くありませんでした。九州では低地型の貯蔵穴が縄文後晩期から出現するが弥生早期との関係は不明、しかも島根県ではこの時期に集落が低地に降りる傾向にありません。一方、東日本では、是川中居遺跡や大洞遺跡など有名な遺跡が知られ、新潟県青田遺跡は地表下5m

という深い場所にあります。青田遺跡は新潟平野が沈降しているということですが、それにしても低地に立地することによって変わりありません。

平野にある低湿地集落と言っても、各地域の地形的な環境によってその状況が違っているので、金沢平野と同じパターンになるような事例はありませんでした。



討論にならぶ講師の方々緊張しています。司会の久田さんもご苦労様でした。

ともかく、縄文時代の後晩期は次の弥生時代につながる重要な時期なので、生業ばかりでなく大きく変化する事柄を十分に把握し、それが弥生時代にどのような影響を与えたか考えることが必要だと感じました。

翌日の午前中は資料検討会。米泉遺跡や長滝遺跡・乾遺跡などの資料や藍胎漆器などを検討し、午後から有志の人が真脇遺跡や御経塚遺跡・チカモリ遺跡へレッツ・ゴー。



一夜明けての資料検討会は、皆さん二日酔い気味のせいがか気持ちよくできました。

## 訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

### 国指定史跡 石動山

鹿島郡鹿島町、七尾市、富山県氷見市にまたがる石動山は標高565m、低山地の続く能登半島では第三位の高峰です。山頂部は大御前・御前山と呼ばれ、周囲から突出しており、遠方から見ても目立っています。

山頂部一帯には延喜式内で能登二の宮とされた伊須流岐比古神社（中世後期以降は「五社権現」とも称される）や、別当寺である古代・中世の石動寺（戦国時代以降の天平寺）の遺構が連なっています。また、その南側の平坦地域には、最盛期中世、大宮坊を中心に約360坊、衆徒3,000人を擁していたとされる天平寺院坊跡が広がり、さらにその外側には霊場や行場跡など、関連遺構が点在しています。中世以後、石動山は何度か戦場となり、そのたびに再建されてきましたが、明治初年の廃仏毀釈によって廃絶しました。

このように、石動山全体が山岳信仰（修験道）の拠点となっていたことから、約3.1km<sup>2</sup>の広大な区域が史跡として指定されています。

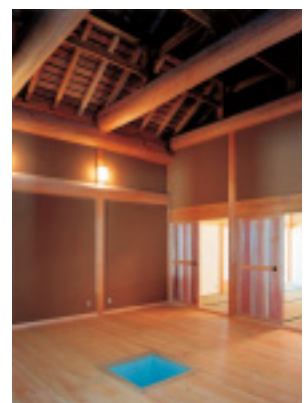
石動山では現存する近世の建物を保存するとともに、各所で行われた確認調査や発掘調査などをもとに徐々に復元整備が進められてきました。その中でも石動山天平寺を支配する別当寺として、山内で最も権威と格式を誇る坊であった大宮坊の復元・整備が昨年秋に完成し、今年4月1日から本格的に公開されます。今回の整備では、大宮坊の歴史的空間を再現するため、書院台所棟・番所・厠・御成門・台所門・板塀・勅使橋などの建造物や、本堂跡・証誠殿・庭園跡などの遺構を復元しています。また、大宮坊の向かいには石動山資料館があり、石動山の歴史を学ぶことができます。



大宮坊全景



書院座敷



書院居間

（写真提供：鹿島町教育委員会）

交 通：鹿島郡鹿島町二宮より車で20分

所 在 地：鹿島郡鹿島町石動山・二宮

大宮坊開場日：4月1日～11月30日（午前9時～午後5時、見学料無料）

お 問 い 合 せ：鹿島町教育委員会 TEL 0767-76-2011